

2016年11月19日 秋期講座第四回講座 冒頭

門野 泉

2016年10月29日秋期講座第三回『冬物語』解説と復習（於：S Jハウス）

10月29日は、『冬物語』を取り上げました。前回の復習の前に、『冬物語』の主な材源（“source”）となったロバート・グリーン（Robert Greene, 1558-92）の散文物語『パンドストー時の勝利』（*Pandosto, the Triumph of Time*, 1588）に触れておきたいと存じます。

ロバート・グリーンはケンブリッジ大学出身の文人で、最初の職業劇作家と考えられています。『パンドスト』は、1588年に出版されて以来、人気が高く、出版を次々重ねた作品です。したがって、当時の観客にはお馴染みのストーリーでした。

シェイクスピアはグリーンのある有名な物語を材源にしますが、劇の結末を完全に書き変えました。『パンドスト』の主人公、ボヘミア王パンドストは、王妃とシチリア王との関係を疑って激しく嫉妬します。けれども、ひとたびアポロの神託で王妃の潔白が証明されると、パンドストは根拠のない嫉妬を恥じて謝罪します。皮肉なことに、王が完全に深く後悔した時、王子の訃報が届きました。王子の死にショックを受けた王妃までも息を引き取ります。パンドストは、王子と王妃の突然の死を悲しむあまり自殺を図ります。臣下に説得されて死を思いとどまったパンドストは、長い改悛の時を過ごしました。

『冬物語』同様、16年の月日が過ぎ去ります。パンドスト王は妻の面影を映す若い女性に出会い、情欲を抱きました。実は、その女性こそ、16年前に捨てた実の娘とわかります。王は自らの罪深さに絶望し、命を絶ちます。

かつて、シェイクスピアを「成り上がりもののカラス」、「驚くべき『何でも屋』」と誹謗したロバート・グリーンのある暗く悲惨な物語『パンドスト』から、シェイクスピアは家族再会と「王妃復活」を描く悲喜劇を生み出しました。

復習に戻ります。『冬物語』は、第一・二つ折り本では喜劇に分類されていますが、正確には悲喜劇、ロマンス劇のジャンルの作品でございます。神父様は、『冬物語』が『ペリクリーズ』、『シンベリン』とともに、最後の劇『ヘンリー八世』を予告する劇であり、悲劇『リア王』ともかかわりがあると指摘されました。

シェイクスピアが海のないボヘミアの沿岸を書いたために、シェイクスピアは地理に疎いと非難する方も多いのですが、神父様は、シチリアとボヘミアを

逆に描いたシェイクスピアの深い意図を解き明かしてくださいました。『パンドスト』では、羊と羊飼いで名高いシチリア王が、ボヘミア王パンドストの宮廷に滞在している設定です。ところが、『冬物語』では、シチリア王レオンティーズの宮廷にボヘミア王が滞在しています。神父様は、場を逆にしたのはシェイクスピアが地理に疎かったためではなく、島国シチリアはイングランドを、大陸のボヘミアはローマを示唆し、さらに、ボヘミア王ポリクシニーズは教皇を暗示するためだったと御説明下さいました。ベン・ジョンソンが事実に基づく“art”の完成度を重んじたのに対し、シェイクスピアは“nature”を重んじ、母国イングランドを描くことに関心を寄せたのです。

『冬物語』の冒頭、シチリア王レオンティーズは親友のボヘミア王ポリクシニーズとの別れが辛く、帰国を引き留めます。しかし、ポリクシニーズは頑として聞き入れません。ところが、シチリア王妃ハーマイオニが引き止めると、即座に帰国を延期しました。レオンティーズは身重な王妃とポリクシニーズの関係を怪しみ、激しく嫉妬します。レオンティーズは王妃を投獄し、信頼する臣下カミローにボヘミア王の毒殺を命じました。カミローはボヘミア王に危険を告げ、二人で密かにボヘミアに出発します。王妃は獄中で王女を出産しますが、シチリア王は王女を自分の子供と認めようとはしません。捨て去るようにと冷酷な命令を出しました。

“Gracious queen”と形容されるハーマイオニは、ロシア皇帝の王女としての矜持を保ちます。裁きの場の毅然としたハーマイオニの姿は、ヘンリー八世の最初の王妃キャサリンを想起させます。ハーマイオニは、デルフォイのアポロの神託に身の潔白を証明してもらいたいと願い、レオンティーズも聞き入れました。ところが、神託が王妃の潔白を告げても、レオンティーズはアポロの神託を信じません。神罰か、王子は急死し、その報に王妃もショックのあまり倒れてしまいます。王は自分の罪深さに打ちのめされ、深く後悔しました。一方、ボヘミア沿岸に捨てられたシチリア王女を羊飼いが拾い上げます。第三幕までは悲劇的展開です。

第四幕冒頭に口上役の「時」が登場し、16年の時間の経過を告げ、場面はボヘミアに移ります。羊飼いが拾い上げた王女パーディタは美しく成長し、母親同様、聖母マリアの美德（“grace”）を備えた村娘として登場します。パーディタに心惹かれたボヘミア王子フロリゼルは、宮廷を抜け出しては娘に会うために村を訪れ、遂に父親のボヘミア王に見咎められます。レオンティーズの臣

下だったカミローは、若い恋人にシチリア王のもとに行くよう勧め、カミロー自身も母国に戻ります。

第四幕に登場する陽気なスリ、オートリカスに関して、1592年にロバート・グリーンが大学出の劇作家たちの作品を盗用しているとシェイクスピアを非難した過去と出来事を踏まえて、シェイクスピアが開き直りを見せるかのように、村人の持ち物を盗み取るオートリカスにシェイクスピア自分自身を投影させていると説明なさいました。

第五幕は春のシチリアが舞台となり、主要人物がシチリアに集結します。シチリア王レオンティーズは、ボヘミア王子とパーディタを大歓迎します。レオンティーズがボヘミア王ポリクシニーズを称える台詞では、ボヘミア王にローマ教皇を響かせているとの御説明がありました。その後、シチリアにやってきた羊飼いは、パーディタの本当の身分を示す証拠を持参し、レオンティーズと娘が再会を果たす喜ばしくも驚きに溢れた場面となります。けれども、その場面は舞台では上演されません。三人の廷臣が「驚き」の模様を物語るのです。

「驚き」は、シェイクスピア劇のキー・ワードとなっています。

劇の最大の驚きは最終場面に控えています。ポーライナは、ジュリオ・ローマノが彫刻したハーマイオニ像を披露するため、皆を自宅に案内します。シェイクスピアがジュリオ・ローマノの名前に敢えて言及したのは、彼の名前でローマを印象づける効果を狙ったと思われれます。ポーライナは信仰を呼び起こすよう要請した後、ハーマイオニの彫像を披露し、ハーマイオニの「復活」という「奇跡」が上演されるのです。

『冬物語』は、「ロザリオの祈り」のように、喜びの玄義、悲しみの玄義を経て最後に、栄光の玄義を表すハーマイオニの「復活」に至る劇です。「ロザリオの祈り」は、カトリックへの弾圧が激しくなり、イングランドの司祭の数が減少しました。この事態を案じたガーネット神父は、「ロザリオの祈りの会」を提唱しました。ミサに与れないレキュザントが集い、「ロザリオの祈り」を共に祈ったのです。このような事情から、「ロザリオの祈り」は、レキュザントにとって重要な祈りでした。神父様のご意見では、シェイクスピアが「ロザリオの祈りの会」のメンバーだった可能性も考えられるとのこと。ハーマイオニが成長した娘パーディタに神の恵みを祈り、劇は終わります。

神父様のお話の後、時間の関係で質問は省略し、引用個所を朗読して秋期講座第三回目が終了いたしました。